

関東の萱土手

むかし、中里の地に手塚五工門という人が住んでおりました。五工門は俗に地代官と称せられ、この土地の物資流通を引き受けるとともに、地域管理にも携わっていたともいわれています。

五工門は、この中里の地をお米のとれる土地にしたいと考え、田を増やす計画を何度か試みました。しかし、この地が湿地帯であり水路を引いても増水のたびに壊されてしまい、なかなか完成には結びつきませんでした。

「どうしたらいいもんかのう、何かいい方法はねえもんか。」

と悩み続けました。

ある時、何日も雨が降り続き川は水量を増し、五工門は鬼怒川から中里までの水路が心配になり見回りに出ました。途中水路の曲がりくねった所に一株の萱があり、その株がまわりの土をしっかりとささえているのに目をとめました。

「ああっ！これだ！萱の株を土手に植えれば、土手が崩れることがなかるう。」
と、五工門は思ったのです。

「さてさて、問題はどのようにして萱の株を集めたらよいものか。」

思いめぐらす日々が続きました。

「そうだ。萱の株を持つてきた者に賞金を与える方法はどうかかな？」

と考えたのでした。

五工門は、早速、村のあちこちにおふ

れを出しました。

「荷車一台分の萱の株を持つて来た者

には、箱の中の銭をつかみ取りさせよ

う。」

と、村人の意欲を掻き立てたのでした。

やがて、この計画は、村中に知れ渡り

評判になり、あれよあれよという間に萱

の株が山ほど集まりました。

この試みは見事に功を奏し、ついに

増水でも崩れることのない土手が完成し

たのでした。そして、長年の水田整地も

完成し、農作物の収益をあげることがで

きるようになりました。村人たちは、



萱土手(左)と姫宮神社(右)

「五工門様は、てえしたもんだ。おかげで今年の農作物の作柄も、いいあんべいだぞや。」
と大変喜んだそうです。

その後、この難工事を成し遂げた手塚五工門の知恵と萱土手は、広く関東一円に知れ渡り、この新工法を学びに来る人が多かったですということ。そして、後々の世まで

『関東の萱土手』として語りつがれてきたのです。

なお、一説には、この萱土手は、ダムの役目をしていて、増水の時に土手で一時水量を調節したものだとも伝えられています。